

トゥルークの海賊2

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
設定協力

鈴木理華
大利根潮

1

共和宇宙標準曆九三七年、十二月——。

飛行中だったダイアナは昔なじみの船を見かけて声を掛けた。

「こんにちは、ラナート」

「やあ、ダイアナ。相変わらず美しいな」

気さくに答えた《シルヴァー・スター》の船長にダイアナも笑って答えた。

「あなたもね。わたしは人間の顔の美醜びしゅうは専門外だし、興味もないけど、あなたのような人を美男と言うのでしょ」

その言葉は決して誇張ではなかった。

ラナートは銀星ぎんせいという綽名あだなの由来ともなった鋼はがねのような光沢のある銀髪と、対照的に浅黒い肌が特徴

的な堂々たる美丈夫びしょうふである。

ラナートはダイアナの言葉に含み笑いを洩もらすと、からかうような口調で言ってきた。

「やっと操縦者を迎えたと聞いたが、おまえと同様、かなりの部分で普通ではないようだな」

野良犬、野良猫という言葉があるが、ダイアナは世にも珍しい『野良船』だった。

通常、感応頭脳の使用期限は二十年。海賊行為に使えるようにアレンジすると寿命はもつと短くなる。

そんな中、ダイアナ・イレヴンスと自称するこの感応頭脳は既に四十年以上、宇宙を飛んでいる。

決まった船主も持たず、操縦者も乗せずにだ。

そのダイアナがついに操縦者を乗せたというので、無法者の船乗りの間では、少し前からちよつとした話題になつているのである。

《シルヴァー・スター》の通信画面に映る若い女は細い眉まゆを顰ひそめて言ってきた。

「わたしが普通でないのは何しろ自分のことだから

認識しているけど、彼が普通ではないと言われてもわたしは他の操縦者を知らないから理解しかねるわ。あなたが言っているのは何のことかしら？」

こういう言い回しに少々機械くささを感じるが、それだけだ。知らない人間が見たら、とてもこれが感応頭脳が自作した映像とは信じられないだろう。「安定度数八十五以下の《門》を跳んだそうだな。コスタス星系でだ」

「耳が早いね。一昨日のことよ」

「ランバルトが血相を変えて知らせてきた。酒でも食らって夢でも見たのかと言ってやったが——倍の勢いで言い返された。それが事実だとしたら、俺も到底信じられん」

「そう？ 事実よ。残念ながら」

「おまえの意思で跳んだのではないのか」

「いいえ。わたしには不可能。わたしは機械だから自分が破壊される危険は冒せないわ」

《駅》の設置されていない《門》の跳躍は、そ

れでなくとも危険を伴う。

通常、安定度数が九十以上を示していなければ、感応頭脳は跳躍の許可を出さない。

海賊が使う改造した頭脳でも八十五以上でやっと承認するくらいだ。それでも命懸けの跳躍になる。しかし、先日のことだ。

ダイアナはコスタス星系で、安定度数八十二の《門》を跳んだという。

偶然その《門》の傍にいて、《門》の状態が回復するのを待っていた《アルベルティーナ》の船長、特攻ランバルトがすっかり興奮しきってラナートに連絡してきたのである。

「眼を疑ったぜ！ 何だありゃあ！ ダイアナの奴、何か新兵器でも乗つけたのか？」

八十二という数値にはラナートも仰天した。

耳を疑いながらも首を振った。

「乗せたのは操縦者だ。とうとう乗り手を決めたと少し前から噂になってる」

ランバルトは大げさに眼を見張った。

「——あれを人間がやったってのか？ 冗談だろ」

ランナートもまったくもって同感だった。

危険な跳躍なら二人とも何度もやっている。

何しろこちらはお尋ね者で官憲に追われる身だ。

しつこい追跡を振り切る時の常套手段^{じょうそうしゆ}だったのが、

それにしても八十二は低すぎる。

ランナートはその疑問を直接ダイアナに訊^きいてみた。

「おまえの意思ではないというが矛盾^{むじゆん}しているぞ。

自分の性能^{スベク}では跳べないと判断したなら、操縦者^{さうじゆう}が

跳躍を提案した時点で反対すべきだろう」

「いいえ。矛盾しないわ。わたしには不可能^{むじゆん}だけど、

自分なら跳べると言った彼の言葉に嘘^{うそ}はないと判断

して従ったまでよ」

これが人間なら相手に深い信頼を置いた言葉だが、機械のダイアナに『信頼』という心の働きはない。

何をもって嘘はないと判断したかは定かでないが、

ダイアナなりに確証を得たということだ。

「——おまえのことだ。その操縦者がどこまで低い

数値なら跳べるのか、既に試したんじゃないか？」

「試しているのはわたしじゃないわ。本人よ。今の

ところ一番低い数値は七十八」

ランナートの銀色の眉がびくりと反応した。

「……おまえの操縦者は命が惜しくないらしい」

「ええ、そうみたいね」

あつけらかんとダイアナは言った。

「人間の心理はわたしには理解できないけど、彼は

もういつどこで死んでもいいらしいわ」

今度は苦笑したランナートだった。

「あの歳でずいぶん厭世的^{えんせいてき}なことを言うものだ」

「あら？ あなた、彼を知っていた？」

「以前、会ったことがある。奴がまだおまえに乗る

前の話^がだな」

その時も同じ感想を抱いた。

まだ若いのに——そう言うランナートも三十歳にも

なっていないのだが——誰も傍に寄せない雰囲気

纏まとっていた。

荒すまんでいるわけではないのに、妙に静かな、暗く燃える眼をしているというのが第一印象だった。

あの若者がダイアナの操縦席に収まったと聞いて、納得したのも確かだった。

「——そこにいるのか？」

「いいえ。これから迎えに行くところよ。あなたも同じところへ行くんじゃないの？」

「ああ。《アゴット》もこれが見納めだからな」

宇宙基地《アゴット》は今日も繁盛していた。

《駅》ステーションには及ぶべくもない小さな宇宙基地だが、ここには一度に十五隻もの船を繫留けいりゅうできる埠頭ふとうがある。船を修理し、補強する船渠せんきもあれば、武器を積み込む設備もある。

感応頭脳の改造をするアレンジ・マシンもあれば、アレンジャーもいる。

宇宙基地なら必須の外部灯も極力抑えられていて、

目立たないように小惑星帯に隠れている。

この小惑星帯の近くに比較的安定度数の高い《門》ゲイトがあるのだが、その《門》は未登録だった。

当然、連邦発行の航宙図にも載っていない。

一般人には知られていない《門》ゲイトなのだ。

従ってこの《門》ゲイトを知っているのも使えるのも無法者アウトローの船乗り——いわゆる宇宙海賊だけだった。

宇宙海賊はこんなふうに一般の船乗りが知らない独自の《門》ゲイトと航路をいくつも持っている。

航路だけではない。船の整備や武装、食料の補給、《門》ゲイトの閉鎖が続く時を想定して乗員の娯楽まで提供する中継基地を密かに確保している。

ロンダ星系の《アゴット》もそんな基地の一つで、不法な船乗りが集こめて賑にぎわう場所だった。

内部には重力を利かせてあるので普通に動けるし、賭場とばを兼ねた酒場もある。

そうなれば自然と女たちも集まってくる。

派手に化粧した仇あつぱい女たちが今、商売抜きで

眼の色を変えて一人の若者の周りに群がっていた。

二十歳をいくつも出ていない年頃だが、女たちが夢中になるのも頷ける、ずば抜けた美貌の主だ。

端整で甘い顔立ちなのにどこか野性味と精悍さも備えており、近寄り難い雰囲気すら醸し出している。

若者は自分にまとりつく女たちに興味を示さず、酒杯を傾けていたが、相手にされない他の男たちは傍目にも苛々していた。

《アゴット》のような基地は海賊たちの交流の場で、揉め事は厳禁なのだが、一人がたまりかねて椅子を蹴立てて詰め寄ろうとした時、高らかに声が響いた。

「いよう、キングじゃねえか！」

朗らかな声で言ったのは《デス・キャバリー》の船長、豪傑アーヴィン。

その呼び名の通り豪放磊落な性分で、丸顔に強い顎髭を生やし、ぎよろりと力の強い眼、中背ながら樽のような腹が特徴的だった。ただし、樽の実態が鍛えに鍛えた筋肉であることは言うまでもない。

喧嘩をふっかけようとしていた男は大物の登場に氣勢を削がれてすごすご引き下がり、逆にキングと呼ばれた若者はいやそうな顔になった。

「——そんな名前で呼ばれる覚えはねえよ。俺にはケリーって名前がある」

「いいじゃねえか。よう、姉ちゃんたち。悪いな。俺はこの無愛想な兄さんにちよつと話があるのさ。外してくれねえか」

女たちを追い払って自分がケリーの隣を占めるとアーヴィンは声を低めて問いかけた。

「——おめえ、ヤヌークとアゴステを結ぶ《門》を見つけたってのは本当か？」

ケリーは答えない。黙って酒杯を呷っている。

アーヴィンのほうが焦れたそうに詰め寄った。

「独り占めはねえだろう。教えろよ。何なら少しは都合するぜ」

すると、別の声が割り込んだ。

「そういう話なら、ぜひわたしも混ぜて欲しいね」

呆れたような声でアーヴィンが言い返した。

「相変わらず金儲けの話には食いつきが早えよなあ、教授。どつからでも聞きつけて来やがる」

穏やかで知的な中年の男性は《ヒルデガルド》の船長グレン・ロス。通称、教授ロス。

彼もケリーと同じテーブルに座って酒を注文した。

「彼が《門》を独占したいと言うなら話は別だが、それでは何の利益も生まない。貴重な資源は有効に活用すべきだと思うよ」

「おう。ヤヌークとアゴステを直結できたら結構な上がり、が期待できるぜ」

《門》を制するものが宇宙を制するのだ。

無法者の男たちにとって、有益な《門》の情報は何より貴重で、高い金を払っても手に入れる価値があるものだった。

熱心な二人に対してケリーは肩をすくめている。

「早まるなよ。——少なくとも繋がってはなないぜ」

「直通じゃねえってことか？」

「どんな経路なんだね？」

アーヴィンとロスが身を乗り出した時、柄の悪い三人が声を掛けてきた。

「——アーヴィン。そいつが噂の若造か？」

大物二人を前にして物怖じせず話に割り込んでくるのだから、この男たちも裏世界ではそれなりに実績があるということなのだろう。

彼らはケリーに興味があるようだった。

それも悪い意味でだ。一人でひっそり呑んでいるケリーを大人しそうと侮ったのか、無礼にじろじろ眺め回している。

「——何でえ。まだ餓鬼じゃねえか」

あいにく餓鬼と言われるにはケリーは大きすぎた。彼が座っているから男たちにはわからなかったのだろうが、立ち上がれば一九六センチの長身である。

ケリーは男たちを相手にしなかったが、代わりにアーヴィンが皮肉たつぷりに笑って答えてやった。

「そうよ。今売り出し中の海賊王だぜ」

「……売り出してねえつてのに」

ケリーは顔をしかめてぼそりと呟き、三人の男は尖った口調で口々に言ってきた。

「あのクレイジーな船がいつに乗り手を決めたって評判になつてるが……」

「蓋を開けてみたら、こんな小僧かよ」

「あの船はてめえみてえな餓鬼にやあもつたいねえ。こつちに譲れや」

男たちの言い分に、ケリーはわざと眼を見張つて言い返した。

「俺は別にあいつの持ち主になつた覚えはないぜ。」

操縦者限定登録だつてしてない」

アーヴィンが眼を丸くし、ロスはやれやれと首を振り、絡んできた男たちは眼の色を変えた。

「操縦者登録をしてないだど!？」

「そうさ。俺はただ操縦席に座つてるだけだ」

ケリーは真顔で頷いた。

「だから、あいつに乗りたいたいんなら『乗せろ』つて

言えばいい。それで搭乗口を開けてくれるぜ」

男たちはますます剣呑な態度になつた。

「おい。ふざけるなよ。問題はその先だ」

「どうすれば殺されずに済むのかつてんだよ!」

ダイアナ・イレヴンスは野良船であるばかりか、信じられないことに人間を殺す感応頭脳でもあつた。

今まで彼女を手に入れようとした者は一人残らず命を落としている。

この三人は、ケリーが彼女に殺されない何らかの方法を発見したのだと思つたのだろう。その方法を教えろと迫つたが、ケリーは呆れて言い返した。

「知るかよ、そんなもの」

男たちは当然、この言い分を信じなかつた。

「じゃあ何でおまえだけがびんびんしてるんだ!」

「今までの連中は全員殺されてるんだぞ!」

ケリーだけが無事なのは何か秘策があるはずだという理屈はもつともだが、ケリーは興味なさそうに肩をすくめただけだつた。

「さあな。あいつに訊けよ」

爆発寸前の三人を無視して、アーヴィンが言った。

「けどよ。おめえ今、一人じゃねえのか？ 近くに

あいつらしい船はいなかったぜ」

「——置いてきぼりにされたんだよ」

船体の調整をしてくるから、その間ここで時間を

潰^{つぶ}していと放り出された——と話すケリーを見て、

アーヴィンは腹を抱えて笑ったものだ。

「情けねえ船主だな！」

「だから、持ち主になった覚えはねえって」

面倒くさそうに言ったケリーの腕の端末が鳴った。

「おまちどおさま。今から迎えに行くわね」

甘く艶やかな若い女性の声だ。なめらかで快活な

抑揚の豊かな口調でもある。とても機械が合成して

いるとは思えない耳に心地いい声だった。

ケリーは無造作に言ったのである。

「——ダイアン。おまえに乗りたいてって奴がここに

いるんだが、どうする？」

「あらそう？ わたしはかまわないわよ。あなた、

もう少しそこで時間を潰してられる？」

「ああ」

「それじゃあ《アゴット》の十二番埠頭に入るから、

来るように言ってくれるかしら」

「おいおい、ちよっと待てや」

アーヴィンが苦笑しながら口を挟んだ。

ロスも笑ってケリーの腕の通信機に話しかけた。

「埠頭に入られるのはいささか困るな。補給物資を

積む必要がないなら、できれば遠慮してもらいたい。

何しろ、きみは有名人だからね」

「あら、教授。お久しぶりね。——わたしが埠頭に

入ってもあなたの《ヒルデガルド》には何の影響も

ないでしょ？」

「ああ。わたしもアーヴィンもきみを歓迎するよ。

しかしね、他の連中は快く思わないだろう」

「おめえに自分の船の頭脳をいじられるって思っ

ちよっとした騒ぎになるぜ」

「いいわ。ちよつと混み合っているみたいだしね。《ステインガー》と《ドラゴネット》が来たから、わたしは近くに停留する。位置を送るわ」

ケリーの腕の通信機に座標が送られてくる。

搭載艇とうさいていでほんの一飛びの距離だ。ケリーは通信を切り、その座標を三人の男たちに見せて言った。

「だとよ。あいつに乗りたくないなら行けばいい」

三人の男は顔を見合わせて行動に出ようとしたが、静かな声が掛かった。

「やめておけ」

三人がちよつと怯ひるんで振り返る。

そこにいたのは《ブルーライトニング》の船長、ブルズアイジャックだった。

ジャックはケリーとは別の意味で妙に人目を惹ひく男だった。百六十センチ程度の小さな体軀たたくなのに、全身から冷ややかな鬨志とろしが吹き出しているようで、彼の体格を侮あやった連中は揃そろいも揃そろって徹底的に思い知らされる羽目になっている。見た目を裏切る怪力

の持ち主で、百キロを超す体重の部下が酔いつぶれた時、片方の肩に軽々と担いで帰った話は有名だ。

身内には情の厚いところを見せるが、基本的には冷徹な性格なので、敵には手加減も容赦ようしやもしない。

歳は三十代の後半になるといだが、とてもそうは見えなかった。色白で鼻筋の通った顔立ちは十歳は若く見える。どちらかというとな顔なので、それも初対面の人間に侮あやられる一因いちんになっているが、毗まなじりの切れ上がった視線は鋭く、迂闊うかつには触れられない刃やいばのような雰囲気がある。

ジャックは静かにやってきてケリーやアーヴィン、教授の座っているテーブルの隣に一人で座った。

「あの船は本当に人を殺すぞ。無駄死にすることもないだろう」

「けどよ、ジャック……」

「おかしいじゃねえか。なんでこの小僧こそうだけ……」

小柄な相手の威圧感に怯おそみながらも、三人の男はひどく不満そうだった。

ケリーのほうが訝しげに尋ねたくらいだ。

「何でそんなにあいつに乗りたくないんだ？」

「海賊船にするにはうってつけだからさ」

にこりともせずにはジャックが答える。

「人命にはお構いなしにミサイルや砲をぶつ放す、

他の感応頭脳に干渉する、あんなに都合のいい船は他にないだろうよ」

ダイアナは無法者の船乗りの間では昔から有名な船だった。

誰もが一目置く大海賊のシェンブラック曰く。

「あいつは俺の若い頃から一人で宇宙を飛んでいた。その頃は今は違う船体だったが、中身は同じさ。

自分で自分を改良して、武装もして、新しい技術が開発されたら即座に取り入れて性能を上げている」

信じがたい話であるが、これが事実なのだ。

ケリーはさらに疑問の口調で言った。

「あいつがその思惑通りに動くか？ あいつ、他の船に負けたくないだけで、金品のぶんどりには全然

興味持っていないぜ」

滅多に表情を変えないジャックの冷たい眼が少しやわらいだようだった。

「——船の希望に人間のおまえが付き合うのか？」

「いけないか？」

「いいや。相手は何しろ普通じゃない。——ならば操縦者も常識が通用しないくらいでちょうどいい」

水でも流し込むようにジャックは注文の酒を呷り、ケリーに質問した。

「安定度数八十二の《門》を跳んだのは本当か？」

「——あんたもかよ。誰に聞いた？」

「ランバルトだ。あのおしゃべりに見られた以上、裏世界に知れ渡っていると買ったほうがいいぞ」

鋼鉄のような口調の中に楽しげな響きがある。

「——いい加減な奴だが、船乗りとしては恐ろしく優秀だ。そのランバルトが、おまえはもつと数値が

低くても跳べそうだと言っていた。そうなのか？」

アーヴィンとロスもこの話を知っていたようで、

ケリーの顔を見た。

違法な船乗りの彼らにとつて決して無視できない話題だからである。ケリーは答えなかったが、その沈黙を肯定と判断したのだろう。

ジャックは淡々と言ったものだ。

「それが事実ならダイアナはおまえを手放さない。

他の操縦者を迎える道理もない」

ダイアナの希望、操縦者に求める条件は裏世界の船乗りなら誰もが知っている。彼女が口癖くちくせのように言う言葉をロスが代弁した。

「どんな船よりも速く巧みに飛ぶこと。——しかし、八十二とは驚いた。うちに引き抜きたいくらいだが、ダイアナと一緒に来る気はないかね？」

ロスの熱心な誘いにケリーは首を振った。

「遠慮しとくよ」

アーヴィンが、まだ未練がましくしていた三人に笑って言った。

「聞いたろう。安定度数八十二だとよ。てめえらに

同じ真似ができるんならともかく、できねえんならあの船は諦めるあきらこつたな」

三人はまだ不満そうだったが、大物の三人の前で揉め事を起こす気はなかったらしい。彼らが離れて行った途端、アーヴィンはケリーに言ったものだ。

「なあ、どうせ組むなら教授じゃなくて俺にしるよ。それだけの腕は活かさなきゃもつたいねえ」

「悪いが、俺は誰とも組む気はねえよ」

ケリーの口調が少し変わったことに気づいたのは年齢を重ねているロスと——ジャックだった。

アーヴィンは『でかいことをやる』を座右モットの銘とする典型的な海賊だったので、ケリーが非凡な腕を持ちながら積極的に行動しようとしないうのを訝しみ、宝の持ち腐れだと焦れつつ感じていたらしい。

「何でだ。あれだけの船とおめえの腕がありゃあ、どんな豪華客船でもやり放題だぜ。もつたいねえ」
「そんな面倒なもん、誰がやるかよ。あんただってやらないだろうに」

ケリーが言い返すと、アーヴィンは不敵に笑った。「おう。身代金目当ての仕事は何かと面倒だからな。積荷をさつと奪っていきるのが一番だ」

ロスがふざけて言った。

「それもとびきり高価な積荷をだろう。うちの船は狙わんでくれよ」

「教授。俺は仁義は守るぜ」

賑わっていた酒場が妙に静かになった。

ダイアナが話していた《ステインガー》の船長、死神槍デス・ランズのルークと、《ドラゴネット》の船長、龍ドラゴンのセルバンテスが揃って酒場に入ってきたのだ。

この二人はロスやアーヴィンとはだいぶ雰囲気が違う。

ロスは教授という綽名の通り知的な男だ。

表向きは貿易商を装い、稼ぎ方もきれいなもので、血生臭ちなまぐさい仕事はまずやらない。

アーヴィンは主に商船を狙う海賊で、自分で言うように極力人死には出さないようにしている。

比べるとセルバンテスとルークは傍目にも危険な、血を流すことを躊躇ためらわない雰囲気の男たちだった。

ルークは痩せぎすで、色白を通り越して青ざめた顔色で、頬骨ほほほねも尖とがっている。病気のように見えるが、これで体調には何の問題もないらしい。黒ずくめの服装をいつも好んでいるので本当に死神のようだ。

セルバンテスはびんと跳ね上がった口鬚くちひげと香油ホワードで固めた髪、しゃれたダブルの背広トレッドマークが商標トレードマークだった。

伊達男だておとこというのがぴったりだが、薄い唇に浮かぶ微笑は酷薄こくはくな印象で、眼差しもひんやりと冷たい。

二人とも荒仕事を躊躇ためらわないが、宇宙船は滅多に襲わなかった。主に地上の施設を襲撃している。

ただ、二人とも非戦闘員には手を掛けないように努めていた。抵抗すれば容赦はないが、降伏すれば命は助けてやる。その相手が金持ちなら捕虜とらわれにして、身代金をいたたくという商売あきうりをしている。

特にセルバンテスは世間でも悪評の高い独裁者や金持ちばかりを標的めざしとしているので、死傷者を出す

割には一般市民にも非常に人気のある海賊だった。

そんなセルバンテスが馴染みの顔を見て、口髭の端を吊り上げて微笑し、アーヴィンも笑顔で言った。

「よう、龍の。おめえ、ルキアノス星系でずいぶん派手にやったって？」

「おまえもな。二十万トン級をやったと聞いたぞ」

「おうよ。久々の大仕事だったぜ」

大物の海賊たちは意外にも普通に付き合いがある。

お尋ね者同士、持ちつ持たれつというところだ。

特にルークとセルバンテスは同じシエンブラック

海賊団出身ということもあって付き合いが長い。

二人は空いている席には座らずに、カウンターにもたれかかって酒を注文した。

ジャックも同じ海賊団出身だったので、ルークが乾いた声で話しかける。

「おまえは飽きもせず、クリユテの船ばかり襲っているらしいな」

「うるせえぞ、死神」

ジャックのこめかみに青筋が浮かぶ。そこは彼のこだわりで触れられたくない部分なのだろう。

ジャックはルークが言ったように、海賊の中でも特定の船籍の船だけを襲う珍しい海賊である。

こんなふうには棲み分けができているので、縄張り争いなどは起こさずに済んでいるわけだ。

ロスが何やら思案気に言った。

「クリユテか……。一度、仕事をしてみたいんだが、あそこはどうも物騒でいけない。ジャックと仕事がかち合う危険もあるしね」

ジャックがおもしろそうな顔になる。

「何だ、教授。俺は気にしないぜ。むしろ大歓迎だ。どんどんやりやあい。その分こつちが動きやすくなるからな」

ロスは苦笑して肩をすくめた。

「——これだからね。勝手におとりにされてはかなわん」

クリユテはミノス星系に属する連邦加盟国だ。

小国ながら資源の豊富な独裁政権国家で、長年、同星系の惑星ドルジアと戦争を続けている。

同じ星系内に居住可能型惑星が二つあったことが悲劇の始まりだった。最初の移住先である第三惑星クリユテ、そこから発展した第四惑星のドルジアで既に三十年以上、ミノスの主権を争っているのだ。

双方、『これは内戦である』と主張しているので、連邦も表だって介入できない事情がある。

高価な武器や物資の輸送船が頻繁に行き交うので、海賊にとっては上がりも期待できるが、それ以上に危険な場所だった。両国とも軍備には金を惜しまず、輸送船は必ず軍に護衛させているからである。

ジャックはその艦艇を蹴散らして輸送船を襲っているのだから、信じられない話だ。普通、海賊船と艦艇がやり合ったところで勝負になるわけがないが、《ブルーライトニング》が屠ったクリユテの艦艇は既に両手でも利かない数に上っている。当然ながら、クリユテがジャックに掛ける賞金は上がるばかりで、

捕まったら百回でも絞首刑にされるのは必至である。

わざわざ警備の厳しい場所を冒してまで、こんな綱渡りのような仕事ばかりをするジャックは物好きを通り越して変わり者だと、海賊仲間の間で言われている。

そこまでクリユテにこだわるのは、ジャックが昔クリユテの軍人だったから。国に裏切られた復讐をしているのだという噂まであるが、本人が語ろうとしないので真偽のほどはわからない。

確かに彼には妙に潔癖で規律正しいところがあり、元軍人と言われて納得できないこともないが、それ以上に態度や口調は不遜の極みである。

そんな彼と唯一親しくしている相手が颯爽と姿を見せた。

「よう、お揃いじゃねえか」

《アルベルティーナ》の船長、特攻ランバルトだ。目聡くケリーを見付けて大股に近づいて来ると、ケリーの隣にどつかと腰を下ろし、身を乗り出した。

「若い。あの物騒な船をよく手懐けたじゃねえか。最近やたらとおまえの噂を耳にするぜ」

「——よく言うぜ。しゃべってるのはあんただろう、特攻のおっさん」

「おっさんたあ何だ！ こんな色男に向かつて」

ふざけた台詞だが、これが紛れもない事実なのだ。ランバルトは誰が見ても文句なしに「海賊にしておくのが惜しいような」男だった。

並外れた長身はケリーと同じだが、まだ線の細いケリーには出せない男の色気の漂う堂々たる偉丈夫で、金髪碧眼、陽に焼けた褐色の肌をしている。

陽気で賑やかな性分で、頭も切れる。度胸もある。部下思いで気っ風のいいランバルトには兄貴分という言葉がぴったりだ。

事実、《アルベルティーナ》の大勢の船員たちがひたむきにランバルトを慕う様子は『懐いている』と表現するのもっとも適切だろう。

意外なことに、その懐いている一人にブルズアイ

ジャックが入っている——ようなのだ。

ランバルトも元はシェンブラック海賊団の一人でジャックとは同じ釜の飯を食った間柄だ。もちろん今ではそれぞれ一家を構える海賊だし、ジャックも露骨に懐いたりはいないので、わかりにくいのだが、彼はもともとひどく辛辣で口が悪い。ランバルトのことも『いい加減』だの『おしゃべり』だのと言いたい放題だが、それは言葉を変えれば気を許しているということだ。

今日も何やら楽しげにランバルトに話しかけた。

「クリユテの駆逐艦を二隻、仕留めたぞ」

「——聞いてらあ。派手にやってるようじゃねえか。連戦連勝だつてな」

ランバルトの口調は呆れながらも笑っている。

ジャックも含み笑いを洩らした。

「俺じゃねえ。ブルーがやりたがるのさ。——次は軽巡洋艦を狙うかな」

ランバルトはますますおもしろそうに笑った。

「おまえが吊^{つる}される時は見物に行つてやるよ」

ジャックも物騒な笑顔で負けじと言り返した。

「——俺とおまえのどつちが先かな？」

ランバルトも主に輸送船を襲う海賊である。

相手を限定することはないが、時にはジャックと

協力してクリユテの輸送船を襲うこともあるらしい。

軽薄に見えてもランバルトは肝心^{かんじん}なことは一言も

洩らさない。信義に厚く、駆け引きもうまい。

そこにまた一人、彼らに肩を並べられる大海賊が

やつてきた。

《シルヴァー・スター》の船長、銀星ラナートだ。

ラナートも実に見栄えのする長身の美男だから、

酒場の女たちが眼の色を変えているが、ラナートは

女たちには眼もくれなかった。まっすぐ顔なじみが

集まっているテーブルにやつてきた。

名前を知られた海賊がずらりと揃ったものだから、

酒場の人間のほとんどが注目している。その彼らに

囲まれてしまったケリーは居心地悪そうに言った。

「今日はいつたい何なんだ？ やけに大物ばかりが

揃うんだな」

アーヴィンが言った。

「そりゃあおまえ、ここのクソまずい酒ももうじき

呑めなくなるからな」

「何でだ？」

「おいおい、おまえが知らなくてどうするよ」

ランバルトが呆れて言い、ロスが親切にケリーに

教えてくれた。

「その《門^{ゲイト}》が発見されてしまったんだよ」

ロンダ星系の《門^{ゲイト}》を跳躍すると二百七十光年離

れたカリオペ星系に出る。

カリオペは居住可能型惑星があり、《駅^{ステーション}》もあ

る、なかなか賑わっている宙域だ。そこで他に

《門^{ゲイト}》はないのかとゲート・ハンターがカリオペ星

系内を探索した結果、見事にカリオペとロンダを結

ぶ《門》を発見して連邦に報告したわけだ。

そうなれば当然、連邦の調査が入る。

調査の結果、安定度数の高い《門》とわかれば、
《駅》が建設されるだろう。

お尋ね者の海賊が《駅》を使えるはずもなく、
必然的に《アゴット》はお役御免というわけだ。

セルバンテスが残念そうに言った。

「——便利な拠点だったんだが、やむを得んな」

「ああ。また別のところを探さなきゃならねえ」

「そのためにも新たな《門》が必要だよ」

その場にいた七人がいっせいにケリーを見た。

ケリーはこの中で一番年下で、無法者の世界でも

新参者だったが、少しも臆することなく言った。

「あいにく、役に立ちそうな情報は何もねえよ」

「……本当か？」

ルークが探るように言い、立っていたラナートが
ケリーの隣に座るランバルトに声を掛けた。

「代わってくれないか」

「お、口説く気まんまんだな」

おもしろそうに言いながらランバルトは席を立ち、

ラナートに譲ってやった。しかし、自分は隣の机の
ジャックの横に座って、ラナートとケリーがどんな
やりとりをするのか興味津々で見守っている。

ラナートは単刀直入に切り出した。

「俺のところに来る気はないか」

「ねえよ。——《門》が欲しいなら、新しいのを見
付けたらあなたに教えてやる。それでいいだろ」

「よくはないな。それでは到底足らない。安定度数
八十二の《門》を跳べる腕利きを放置はできん」

「できんかったって、するよりしようがねえだろうよ。

俺はあんたの仲間になる気はないんだから」

素直に引き下がる気はないラナートは酒杯を取り、
悪戯っぽい口調で持ちかけた。

「では、おまえの船を掛けて呑み比べはどうだ？」

「無駄だって。あなたが勝ったところで、あいつが
いやだと言えはそれまでだ」

「おまえの船だろう。そのくらい言い含めろ」

「俺のじゃねえよ」

ラナートだけでなく他の顔ぶれも感じていたが、ケリーの態度は無法者としてはかなり変わっていた。

この若さで堅気ではない世界に飛び込んだ人間は、普通はもつと己の力を誇示しようとするものだ。

ろくな経験も技倆ぎりょうもないくせに無闇に強がつて自分を大きく見せようとする、もしくは大物に媚こびへつらつて庇護ひごしてもらおうとするのが普通なのに、ケリーの態度はまるで逆だ。

船乗りなら誰もが眼の色を変える腕を持ちながら、それを誇示しようもしない。

名前を売ることに興味がないらしい。

投げやりというのと少し違う。どこか隠逸いんいつした

『世捨て人』のような秀囲しゅうい気すら感じさせる。

ラナートはそれを踏まえて、敢あえて訊きいてみた。

「何故あの船に乗った？」

「前から誘いわれてたからな」

「ダイアナに？」

「ああ。時々、操縦席に座ってたんだよ。あいつは

ためしに乗せてみた俺を気に入ったらしい。ずっと

本格的にここに腰を据えないかと言われてたんだが……こつちにも用事があつてな、待たせてたんだ」

「待たせないといけない用事だったのか？」

ケリーはあっさり答えたのである。

「そうさ。乗つたらいつ死ぬかわからない船だろう。そこのところがちよつと困つたんだよ」

自分はまだ死ぬわけにはいかなかった。

その用事がやつと片づいたので、もういつどこで死んでもよくなつたのだ。その用事を済ませるのにダイアナにはずいぶん力を貸してもらつた。相手は人間ではないが、借りは返さなくてはならない。

ケリーはそうした事情はいっさい語らなかつたが、ラナートはケリーの口調から『何か』があることは

敏感に察したようだった。

そもそも海賊なんてやる人間は多かれ少なかれ、

人には言えない事情を持つているものだ。

「では、気が変わつたらいつでも来てくれ」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。